

これはイメージではない。
 写真もイメージではない。
 ∴ これは写真かもしれない。

【サインেশョーに寄せて】

これはエコロジーではない。エネルギーを節約するなら、再燃焼させずとも茶碗を洗ってリユースすればよい。これは復興支援でもない。東北を応援するなら、再燃焼にかかった膨大な手間暇でお金を稼いで寄付すればよい。するとこれは一体何なのだろう？ 数千個もの瀬戸物を様々な家庭から梱包発送して提供した人たち、古材提供者、窯焚き協力者たちなど、まことに大勢の人々の時間と労力を費やしたこのプロジェクトは、芸術活動という呆れたイベントにほかならない。しかしまた、これは単なるアート・イベントないしは蕩尽する祭典で終わるものではない。「焼きもの」の「焼くもの」を考えさせる、新ジャンルの発明なのだ。写真と陶磁器とは共通点がある。どちらも焼き付けるという点だ。焼いて何かが固着する。それは形かもしれないし、図柄かもしれない。しかし写真とサインেশョーとは、さらなる共通点がある。焼いて固着するその「何か」が、実はどちらも「過去」だという点である。感板や印画紙を使わないデジタルカメラも、ある時点での光を焼き付ける。「焼く」ということが化学反応なのか、電気信号への変換なのかはともかく、photo〔光で〕graphy〔書くこと〕の基本は、イメージを作り出すことではない。何らかの「モノが存在したこと」を他の媒体に焼き付けることだ。イメージの良し悪しは多くの場合どうでもよい。「過去」があったと書き残すことが重要なのである。「過去」といっても実在した過去ではないかもしれない。「過去」を捏造しているかもしれない。それでも両者は、焼き付けることによって、実在したはずの何ものかを作り出す。いわばデジャ＝ヴュ（既視感）の発生装置である。

再燃焼した焼き物たちには、展示されている現在の姿かたちを透かして、それが過ごした昔の時間が見えている。リユースのため、過去の文字が消されて上書きされた（パランプセスト）羊皮紙の写本のように、再燃焼させられた焼き物にも、再燃焼以前の過去がうっすらと残っている。しかし本当のところは、パランプセストというよりも、再燃焼することで過去が出現したのだ。それは見る者の過去でもなければ焼き物の使用者の過去でもない。私の過去でもあり、あなたの過去、彼／彼女の過去でもあるような、過ごしたはずがない時間である。器を使った人々の声、食卓の会話、家庭の風景、さらには時代状況までも、見たことがなくても、おそらくはそこにあったはずの出来事が浮かび上がる。

勿論、再燃焼の結果の変形や釉薬の変化を造形として面白く見ることもできるだろう。しかしそれは写真をイメージとして見るようなものだ。ピンボケでも、構図が変でも、タンスの引き出しの奥から出てきた古写真には誰の目も釘付けにするような力があるように、押し入れにしまってあった焼き物を焼き直したサインেশョーは、過去と現在とのコントラストを焼き物に焼き付け、見る者を時間の重層性のなかに引き込んでゆく。引き込まれた先は、どこかにあったかもしれないし、しかしまた捏造されたものかもしれない過去である。おそらくは確かにあったであろう過去を、モノとして語るものとして、サインেশョーは新しい芸術ジャンルと言ってもよいだろう。